画巻「宋本　清明上河図」の都市景観の展開

（株）日本ランドデザイン　　正会員　○横松　宗治

画巻「宋本　清明上河図」は、北宋末期に張択端によって描かれた。北宋期、東アジア地域において近世都市がはじめて出現した時期である。その首都開封は、古代・中世の都城制都市の景観とは大きく転換し、近世経済都市の景観に満ちていたものとおもわれる。

本研究は、先に緒論として土木史研究発表会に提出した『「宋本　清明上河図」（以下「宋本」）における土木景観の分析』（本論文提出時点では未発表）を補完するものである。

１．研究の目的

絵画史料を素材にして、過去の都市の土木景観を復元し、その特徴を把握し、さらに現在にまで至る景観的な文脈を描きだす土木史における萌芽的な研究である。「清明上河図」は高度に発達した舟運を画題にしているため、運河、橋梁、船着場などの土木施設が詳細に描かれている。近世経済都市への発展過程にある地域の、多様な活動の中にある土木施設を知ることができる。

また、「清明上河図」は「宋本」を規範としてその後 600 年以上にわたって模本を生み出したため、都市景観の歴史的な変遷をたどることも可能である。例えば、画巻中心の「虹橋（アーチ形式）」は、「宋本」では特異な木造“せりもち”型であるが、清朝乾隆帝の命で描かれた「清院本」では、石造アーチ型式である。

本論文では、土木史研究の本流をややはずれて、“画巻”型式ならではの分割された画題の設定、展開があったものとしての推論を述べる。

2.「宋本　清明上河図」の位置づけ

史料は過去にさかのぼるほど希少であるが、幸い対象とする宋期には風景の客観的な記録をする気風があった。「清明上河図」は、本研究で対象としている「宋本　清明上河図」を規範として、元、明、清期を通じて現在認められているだけで約 40 巻が描かれた。「宋本」は、おそらく時の皇帝徽宗の命令で、張択端が 1100 年から北宋滅亡の 1126 年の間に描いたものと巻末につけられた「跋」から読み取ることができる。

都市景観絵画の傑作であったため、これが規範となって明期、清期に約 40 本の模本が作成された。特に明期には仇英作と伝承される多くの模本が描かれた。

後続する模本の最高傑作は、清朝乾隆帝の初年に帝の命で陳枚ら 5 名が描いた「清院本　清明上河図」である。ほぼすべての建築・土木施設が“界画”と呼ばれる定規を使った技法で、精度高く描かれている。「宋本」と比較し、成熟した近世都市の経済的発展を見て取ることができる。

これら一連の「清明上河図」のうち、筆者は「宋本」、明期の仇英作（伝）の一作、および「清院本」を比較したが、その絵画としての構成、描かれた主題、技法などが共通している。とりわけ描かれた 500 人から千数百人の人々の活動の多様さは圧巻である。これら各本の比較は今後の課題である。

3. 画巻としての「宋本」の見方

日本で絵巻物といわれる絵画形式の一分野“画巻”は、上下に狭く、横に長い画紙を軸に巻き取った型式のものである。画面の横長の展開に優れているため、自然景観、都市景観などのほか物語を展開するにも適した形式である。わが国の「一遍聖絵」、「鳥獣戯画」などはこの形式ならではの物語の展開をみせている。

「宋本」のオリジナルは北京の故宮博物院に所蔵されているが、絹地に描かれているため痛みが激しく久しく公開されていない。サイズは縦 24.8cm、横 528cm であり、台紙に張られ末尾に 10 編の「跋」がつけられている。本研究には、参考文献に挙げた複写を使用した。

画巻の鑑賞方法は、机上に軸を縦に置き、右手を始点側にとり、左手で巻きつけられた軸をとる。両手を

キーワード　清明上河図、都市景観、画巻、中国宋期、土木史

連絡先　〒163-1329 東京都新宿区西新宿 6-5-1 ｱｲﾗﾝﾄﾞﾀﾜｰ 29 階　㈱日本ﾗﾝﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ TEL03-3346-2233

シーン④ シーン③ シーン② シーン①

シーン⑦ シーン⑥ シーン⑤ シーン④

広げると約 75cm 程度の間隔ができる。この中に広げられた画巻の幅が一度に鑑賞できる“世界”である。そして右手を巻き取りながら、“右から左へ”絵画を鑑賞していくのである。例えば「一遍聖絵」などストーリー性をもった絵巻物は、この幅がひとつの完結的なシーンとなっている。そして次のシーンは右手で巻き取られた 75cm 程度先に描かれている。

そこで、この画巻形式が必然であったとして、「宋本」を 75cm 程度に切り分けて、つまりシーンに分割して、そこに都市景観の展開のストーリーを読み取る試みをする。

４.「宋本　清明上河図」の各シーン

横 528cm の画巻を、約 75cm ごとに分割する。右端からほぼ 75cm ごとに画面を半ば隠す樹木がある。この箇所がシーン分割位置と推定される。そのような樹木がない位置では、上下にあまり細かい描きこみのないシーンが存在する。この位置が画巻の広げられた両サイドとなり、鑑賞者の意識はその幅の中心に向けられる。

以下、右端から順次シーンごとの画題を読み込んでみる。

・シーン①…農村から都市へと進む全体の導入部分であり、静かな農村風景である。時刻は朝、朝靄のなかを行く一団が見える。河川も黄河下流域の黄土の地盤をゆるゆると蛇行しながら流れる小水路である。

・シーン②…本画巻の題名の“清明節”の墓参の一行が見える。左端に画巻前半の主要画題“汴河”が登場する。農村から近郊集落への切り替わり地点である。農地は、華北特有の広い畦と低い畝である。

・シーン③…都市近郊の商業地に汴河の主要な係留・荷揚げ地がある。幅広の街路が港に真直ぐ向かう。商業地の地盤は運河水面より 2m ほど高い。水際近くに曳き船のための通路がある。北宋期の都市近郊では、道路も運河護岸も人工的な舗装は施されていない。

・シーン④…本画巻の全幅の中心であるとともに、中心風景の“虹橋”が画面上下を貫いて視野を占める。木造アーチ型式の構造は特異である。橋脚周りの護岸部分だけが自然石で固められている。黄河沖積平野の華北では、自然石は貴重であり、宮殿など公共施設、防衛施設にのみ使用されている。運河船がいままさに虹橋をくぐろうとしている。橋上では臨時の商売が広げられ、北宋期の経済都市（景観）をたっぷりと見せている。

・シーン⑤…画面はこの地点から“陸域”に替り、“陸運”が画題になる。都市の大ぶりの街路空間が描かれる。ただ、城外であるためか街路を区画する建築の配置や舗装・縁石などの施設は見られない。都市内の排水路だけに木製の護岸が施されている。この排水路に生活汚水も排出されていたのかもしれない。

・シーン⑥…“鼓楼あるいは城門”が画面上下に貫く。“虹橋”に続く大型画題である。“門の下をくぐる駱駝隊”は、“虹橋をくぐる河船”とならんで陸運の象徴でもある。特に駱駝は“西から”のメタファーでもある。

・シーン⑦…城内の上質で整然とした街並みが見える。広幅員の道路に規模の大きい商業店舗が軒を連ねる。

5. おわりに

やや強引なシーン区分を試みたが、田園から都市内への景観の変遷を見事に描いていることにあらためて感動する。このような区分が他の「清明上河図」で成立するのか、次の課題としたい。

参考文献

・宋・張択端繪：『清明上河圖巻』，中國古典藝術出版社，1959 年

・伊原弘編：『清明上河図を読む』，勉誠出版，pp. 221～228，2003 年